

世紀を越えて

永井純

人間総合科学研究科教授

筑波大学運動部の活動

私は現在筑波大学陸上競技部部長を務めています。筑波大学は皆さんもご存じのように、東京師範学校、東京高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学、筑波大学と名称を変えてきましたが、各運動部は茗溪の精神・伝統を受け継ぎながら発展してきました。陸上競技部は、明治35年に東京高等師範学校時代に徒歩部として設立され、大正11年に陸上競技部と名称が変わり今日に至っています。陸上競技部の歴史は、今年度創部101年にあたり、ついに一世紀を越えてしまいました。現在、101年の部史「世紀を越えて～茗溪陸上競技101年の歩み～」を編纂しているところです。また、この記念の年に日本学生陸上競技対校選手権大会（日本インカレ）で男子・女子が前って日本一になりました。男子は10回目の優勝（東京文理科大学時代6回、筑波大学になって4回）、女子は筑波大学で15回14年連続優勝。

多くの大学が日本一を目指して頑張っている中で、男女どちらかでも優勝するだけでも大変なのに、両方勝つということは快挙です。

いま筑波大学で活躍している各運動部がどのあたりで設立されたか「茗溪体育80年」によると以下のようになっています。

庭球部	明治16～17年頃設立
弓道部	明治25年頃設立
柔道部	明治27年頃設立
剣道部	明治27～28年頃組織化
蹴球部	明治29年頃設立
短艇部	明治35年頃組織化
野球部	明治35年頃組織化
徒歩部	明治35年設立
遊泳部	明治35年設立
ラ式蹴球部	大正15年頃設立
射撃部	大正15年設立
体操部	大正末期組織化
籠球部	昭和2年設立

卓球部	昭和5年設立
排球部	昭和8年設立
山岳部	昭和8年頃設立
送球部	昭和12年頃設立

このように、各運動部は一世紀を越えたか、それに近い歴史の中で活動し、その競技成績には目を見張るものがあります。各運動部の指導者（主に体育科学系の教員）はボランティアで土日も返上して学生の指導にあたっています。指導者も頑張っていますが、学生諸君の頑張りもすごいものがあります。東京高等師範学校初代校長嘉納治五郎先生の「文武両道」の精神を受け継いでいると思います。

また、各運動部は選手として活躍するだけでなく、部の運営能力（競技集団のマネジメント）にも長けています。これは長い歴史の中でのノウハウが十分生かされていると言えます。人を動かすことは段取り（計画性）が要求され、経験が必要です。このことを4年間身をもって体験した人は教育界においては素晴らしい教師に、またビジネス界においては素晴らしい経営者になると思います。

箱根駅伝のこと

私は36年間、現在も陸上競技の指導に携わってきました。現役時代は800mを専門にしていたので、特に中長距離の面

倒を見えています。筑波大学陸上競技部は約220名が走・跳・投の各ブロックに所属し活動しています。陸上競技の試合は、走・跳・投の総合力で優勝が決まります。陸上競技部の目標は、日本インカレで優勝することにあります。その延長線上に駅伝があり、箱根駅伝のみに特化することはできません。1920年の第1回大会で4校のみの出場でしたが東京高等師範学校が優勝しましたが、それ以来優勝はありません。このところ出場が出来ない状態が続いています。東京文理科大学時代、東京教育大学時代、筑波大学前半期には出場チーム唯一の国立大学として6位～7位ぐらいの順位で頑張っていました。17年前からテレビ放映が始まった途端、出場から遠のいてしまいました。大学に入学した時点で、ハーフマラソンの距離を戦える資質を持った人が必要になってくるので10名揃えるのは大変なことです。また、視聴率25%を越えるお化け番組ですから私立大学が経営戦略として目をつけるのは当然の成り行きです。箱根駅伝を私立大学は完全に大学ぐるみの行事としてとらえています。我々は、陸上競技部で取り組んでいましたが、今後は大学全体で筑波大学の知名度を上げる一つの手段として考えていただきたい問題だと思っています。これは我々の泣き言かもしれませんが…

全日本大学女子駅伝のこと

毎年11月4週目の日曜日に大阪において全日本大学女子駅伝が開催されています。今年度で21回を終えました。21回連続で出場している大学は筑波大学だけになってしまいました。最初の頃は長距離を専門にする学生が少なく、短距離やバスケットボール部の学生の応援を得てなんとか繋いでいましたが、近年になってポツポツと競技レベルの高い学生が入学するようになってきました。お陰様で、1999年優勝、2000年3位、2001年優勝、2002年優勝、2003年7位と、このところ好成績を上げています。しかし簡単に成し遂げられたわけではありません。陸上競技は個人競技で個人の特性にあったトレーニングが必要になってきます。ところが駅伝はチームで戦う競技になります。毎年のごとく、春から夏にかけて関東インカレ、日本選手権、日本インカレと個人種目の試合が続きます。このような状況の中で、個人からチームへ切り替えていくときが大変です。特に毎年悩まされるのが、インカレなどで頑張りすぎたため故障者が多くなることです。この大会も全国ネットでテレビ放映されるので私立大学が大いに力を入れています。駅伝に特化している大学は長距離部員だけでも50名を越しますが、我がチームは10名弱の部員しかいません。夏の合宿から故障をさせないで力が

つくトレーニングを工夫するわけです。まず夏はここまでのシーズンで痛めた箇所のリハビリから入ります。故障をしている人は、どうしても目標意識が低くなりがちで、チームとして形が成されていません。このあたりも苦慮するところです。毎回のミーティングは、個人がチームに同一化することが重要な話題になります。11月末に向けての長期目標、1ヶ月ごとの中期目標、1週間ごとの短期目標を提示し実践します。ここでチームの中でも競技レベルの差があるため、どのレベルに合わせてトレーニングをしていくかになってきます。期ごとの目標に到達したか？しなかったか？の評価があつて修正が行われます。その繰り返しで、チーム力が目標の90%ぐらいになって大会を迎え優勝を狙っていきます。

筑波大学の各運動部は、世紀を越える伝統の中、高い目標をもち、過激なトレーニングに耐えながら頑張っています。どうか皆さんの応援をお願いします。

(ながい じゅん／陸上競技コーチ論)